平成 28 年度
宇部市ジュニアグローバル研修
派遣報告書

オーストラリア・ニューカッスル市

平成 28 年（2016 年）7 月 28 日～8 月 6 日

目　　次

◆　派遣生徒名簿……1

◆　研　修　日　程……2

◆　派　遣　日　程……3

◆　派遣生徒報告

川上中学校　　泉　奈　都　乃……4

上宇部中学校　　内　田　瑞　希……5

上宇部中学校　　加　藤　百　合　香……7

桃山中学校　　西　岡　櫻　音……8

藤山中学校　　樋　口　美　月……10

西岐波中学校　　藤　本　す　ず……11

桃山中学校　　松　原　響　子……13

黒石中学校　　吉　田　色　織……14

宇部フロンティア大学付属中学校　　吉　村　美　乃　里……15

東岐波中学校　　渡　邊　柊　平……17

◆　引率教諭報告

桃山中学校　　尾　﨑　哲　也……19

楠　中　学　校　　永　田　博　子……21

◆　資　　料……24

平成 28 年度宇部市ジュニアグローバル研修事業
（ニューカッスル市）派遣生徒及び引率教諭名簿

派遣生徒

氏　名	性別	学校名	学年
泉（いずみ）　奈都乃（なつの）	女	川上中学校	2
内田（うちだ）　瑞希（みずき）	女	上宇部中学校	1
加藤（かとう）　百合香（ゆりか）	女	上宇部中学校	3
西岡（にしおか）　櫻音（おとね）	女	桃山中学校	3
樋口（ひぐち）　美月（みづき）	女	藤山中学校	2
藤本（ふじもと）　すず	女	西岐波中学校	3
松原（まつばら）　響子（きょうこ）	女	桃山中学校	3
吉田（よしだ）　色織（しおり）	女	黒石中学校	3
吉村（よしむら）　美乃里（みのり）	女	宇部フロンティア大学 付属中学校	3
渡邊（わたなべ）　柊平（しゅうへい）	男	東岐波中学校	3

引率教諭

尾﨑（おざき）　哲也（てつや）	男	桃山中学校教諭
永田（ながた）　博子（ひろこ）	女	楠中学校教諭

宇部市ジュニアグローバル研修事業（ニューカッスル市）研修日程

月日	曜日	行事	参加者
5 月 14 日	土	11:00-16:00 派遣生徒選考試験 宇部市グローバル試験、英語力テスト、集団面接	派遣生徒
6 月 7 日	火	18:00-20:00【ガイダンス】	派遣生徒 引率教諭 保護者
6 月 18 日	土	13:00-17:00【事前研修 #1】目標設定 昨年度派遣生徒パネルディスカッション ワークショップ“紹介したい宇部市の魅力”	派遣生徒 引率教諭
7 月 2 日	土	13:00-17:00【事前研修 #2】ホームステイの英会話 講義 ″紹介したい宇部市の魅力 in English″	派遣生徒 引率教諭
7 月 21 日	木	13:00-17:00【事前研修 #3】 講義 ″紹介したい宇部市の魅力″ in English Part 2	派遣生徒 引率教諭
7 月 25 日	月	14:00-14:45【壮行会】 15:00-16:00【事前研修 #4】 旅行の最終確認	派遣生徒 引率教諭 【壮行会のみ】 保護者 市長、教育長 議長、国際交流委員 姉妹都市友好協会会長、会員
7 月 28 日	木	宇部市を出発	派遣生徒 引率教諭
8 月 6 日	土	宇部市に到着	派遣生徒 引率教諭
8 月 10 日	水	13:00-17:00【事後研修】 ワークショップ ″ジュニアグローバル研修の成果″	派遣生徒 引率教諭
8 月 17 日	水	14:00-15:00【帰国報告会】 15:00-16:00【座談会】	派遣生徒 引率教諭 保護者 【帰国報告会のみ】 市長、教育長 議長、国際交流委員 姉妹都市友好協会会長、会員

宇部市ジュニアグローバル研修事業（ニューカッスル市）派遣日程
（7 月 28 日～8 月 6 日）

月日	曜日	行事	宿泊
7 月 28 日	木	宇部市役所発 福岡空港発	機内
7 月 29 日	金	シドニー空港着 自治体国際化協会（CLAIR）シドニー事務所視察 日本政府観光局(JNTO)視察 ニューカッスル市へ移動 ホストファミリーと合流	ホームステイ
7 月 30 日	土	ホストファミリーとオーストラリアの生活体験	ホームステイ
7 月 31 日	日	ホストファミリーとオーストラリアの生活体験	ホームステイ
8 月 1 日	月	ハイスクール通学	ホームステイ
8 月 2 日	火	ニューカッスル市長表敬訪問 アンザックウォーク・ブラックバット自然動物公園視察	ホームステイ
8 月 3 日	水	ニューカッスル大学ランゲージセンター通学 ハイスクール通学	ホームステイ
8 月 4 日	木	ハイスクール通学	ホームステイ
8 月 5 日	金	シドニー観光 シドニー空港発	機内
8 月 6 日	土	福岡空港着 宇部市役所着	－

派 遣 生 徒 報 告

グローバル研修を終えて

川上中学校　泉　奈都乃

初めてのオーストラリアでとてもドキドキしていました。

出発の時は、なんだか実感がわかなく、修学旅行のようでした。でも、シンガポールに着き、周りから聞こえる声もアナウンスもすべて英語になったとき、初めて「あぁ、ここは外国なんだ。」とハッキリ実感しました。

シドニーに着き、まず初めにオペラハウスなどを見に行きました。ダウンジャケットを着ていてもとても寒く、少しびっくりしました。

そして、「ＣＬＡＩＲ」というところに行きました。そこでは、オーストラリアと日本とのつながりのお話を聞きました。

電車に乗り、ホストファミリーが待つ駅に向かいました。ホストファミリーに会い、お家に向かうと、ホストシスターのＫｉｒａ、ＳａｒａそしてＩｓａａｃが誕生日の近かった私にサプライズをしてくれました。

初日は、爬虫類園に行きました。そこにはヘビ、クモ、ワニなど少し怖い生き物から、コアラ、カンガルーなどのオーストラリアらしい生き物がいました。行き帰りの道は、カンガルー注意の標識など日本にはないものが多くありました。

月曜日、初めてコタラハイスクールに行きました。私たちは、Ｙｅａｒ８の日本語クラスに行きました。みんなとても日本語が上手でした。１時間目が終わると、お菓子の時間がありました。朝ごはんも食べたばかりなのにすごいと思いま

した。私はそこで初めてＫｉｒａ以外の人と英語で話しました。みんなたくさん話しかけてくれました。でも聞き取れなく、とても申し訳なくなりました。その後もみんな、「こんにちは」と、声をかけてくれて、ハイタッチまでしてくれました。

水曜日には市長訪問や動物園に行ったりなど、とても楽しかったです。

木曜日は最後の日なので、派遣生とホストファミリーそして先生方と小さなパーティーをしました。とても充実したパーティーでした。

夜、ホストファミリーとケーキを作りました。とてもおいしく、いい思い出になりました。お別れの日、家にいるときから悲しくて泣いてしまいました。でも、7 日間でそれだけかけがえのないもう１つの家族ができたということに喜びました。

この研修では語学のことだけではなく、とても大切なものを多く学べました。この経験をバネにし、より勉強に力を入れたいです。

最後に、私を支えてくれた両親、先生方、国際政策課の皆さま、ホストファミリー、そしてすべての方に感謝します。

帰国報告書

上宇部中学校　内田　瑞希

私が話すアメリカ西海岸英語とオーストラリア英語との違いを知ること、そしてオーストリアの人と友達になること。それが私の目標でした。

思った通り、オーストラリアで使われている英語と、私の英語は少し違うものでした。

特にＡサウンド―Ａの発音が違います。知らない言い回しがあったりもして、初めの 2 日は、英語なのにドイツ語を聞いている様な気分でした。そしてどうやら私の英語にも少し分かりづらい箇所があったらしく、お互い様のようでした。だからしばらく、会話の時には、相手の口元を見たり、自分もはっきり話すことに気を付けました。

私が最も楽しみにしていたのは現地校での授業です。

地理では、自分が住むならどんな場所に住みたいか、逆にどこに住みたくないか。それはなぜかを明確にする学習をしました。

オーストラリアで一番暑く乾燥して孤立している「クーバーペディ」に住むことについて、利点や不利な点を各３つずつ考えます。次に住む場所に求める条件を１０個考え、話し合いではそれぞれ意見を言い合いました。

国語の授業では食べ物や休日やスポーツをテーマに「韻文で書く」条件に従っ

て詩を作り、理科の時間には汚水を綺麗にする学習や実験があったりと、私がこれまで習ったことがないものばかりで非常に面白かったです。後でまたノートを読み返して、習ったことを思い出そうと思います。

生活における様々な発見もありました。

例えば水の流れ。地球の自転の影響があるから、南半球では反時計回りだと思っていたけど、水は排水溝へ時計回りに吸い込まれていきました。

のんびり者だと思い込んでいたコアラが実は元気に走ること。動物園で、コアラはなんと地面をビョコビョコ走り回っていたのです。

日本における英語のように日本語の授業があったり、ハイスクールのみんなに珍しがられてシャーペン自体が存在しないことも知りました。アメリカで６年前にすごくはやったＰＳＹの「江南スタイル」の大流行が去年だったことにも驚きました。

また、壮行会では緊張しすぎて大失敗した私ですが、これを反省し、以後のプレゼンテーションでは、恥ずかしがらずにできる限りはっきりと大きな声で話すことが出来ました。たくさんの人と交流したおかげで人ときちんと話せるようにもなり、コミュニケーション能力を高めることが出来たと思います。

ホストファミリーには親切にしてもらい、ホエールウオッチングや買い物に行ったり、その日の出来事や日本との学校生活の違いなどいろんなことを話すことができました。

日本にいるだけでは体験できない様々なことを体験できて、百倍くらいは賢くなれた気がします。本当に有意義で素晴らしい１０日間になりました。

私の生まれて初めての海外

上宇部中学校　加藤　百合香

私の生まれて初めての海外。それは、とても貴重な初体験となりました。猛暑の宇部を出発し、シンガポール経由で丸１日かけて着いたオーストラリアは、季節が真反対の冬でした。今までは、テレビなどでしか見たことのない景色でしたが、オペラハウスやハーバーブリッジを目の前にすると、オーストラリアに来たんだなと実感しました。

シドニーからニューカッスルに向かう電車の中で、いよいよ英語しか使えない生活が始まるんだなと思うと緊張してきました。駅に着くと、たくさんのホストファミリーが待っていてくれました。「ユリカ、ミノリ」と呼ぶ声が聞こえ、ホストファミリーとの対面となりました。私のホストのスーさんは、コタラハイスクールの先生で、スーさんの夫のアルバンはパイロットでした。この二人の家に私と美乃里ちゃんの二人で泊まることになっていました。

早速ホストファミリーから話しかけられましたが、長文は私の英語力ではほとんど分かりませんでした。しかし、英語だけの生活を送っていると、だんだん耳が慣れてきたのか、だいぶ聞き取れるようになり、答えようとする勇気もわいてくるようになりました。

日曜日の昼食では、なんとカンガルーのお肉を食べました。噛み応えがあり、意外にもおいしかったです。

平日はコタラハイスクールに通いました。生徒たちは、目が合うとすぐに笑ってくれるし、とても親切だったので安心しました。学校生活で驚いたことは、休憩ごとに外に出て何かを食べること、授業中にもかかわらずゲームをしている人がいることでした。他にも驚くようなことはたくさんありましたが、この二つは特に驚かされたことでした。

私がコタラハイスクールで一番頑張ったことは、授業を少しでも理解しようとしたこと、図書室で宇部の事を紹介するプレゼンテーションを約２００人の前で行ったことです。プレゼンテーションが無事終わった後、コタラハイスクールの校長先生と握手ができ、達成感と共にとてもほっとしました。

皆で行った動物園では、コアラ、カンガルー、ウォンバットに会うことができました。コアラは私が買ったかわいいコアラのぬいぐるみそのままでした。

そしていよいよお別れの日。私は日本に帰りたくなくなるほど、オーストラリアが好きになっていました。スーさんとお別れするとき、少し泣いてしまいました。しかし、スーさんは笑顔で私たちを見送ってくれました。

たくさんの驚き、たくさんの初体験、たくさんの素晴らしい思い出ができました。この貴重な体験をこれからの生活に生かし、今まで以上に英語を勉強し、もっとコミュニケーション力をつけて、再びオーストラリアに行きたいです。

最後に、私にこの素晴らしい体験をさせて下さった皆様に心よりお礼申し上げます。

帰国報告書

桃山中学校　西岡　櫻音

福岡空港からシンガポール空港そしてシドニー空港と人生で初めての海外が近づいてきていたのに、緊張はせず実感もわかなかった。というより興奮の方が大きかった。オーストラリアに着いてまず研修メンバーとオペラハウスや教会などのシドニー市内観光をした。オペラハウスなどは写真で目にしたことはあったが実際に見てみると、とてもきれいで映画のワンシーンに出てきそうなくらいだった。そしてシドニーの観光を終え、電車に乗りブロードミドウ駅へ向かった。ブロードミドウ駅ではホストファミリーが出迎えてくれた。ホストファミリーが見えた瞬間、ようやくオーストラリア研修が始まるという嬉しさと英語で会話しないといけないという緊張のあまり考えていた自己紹介を忘れてしまった。ホストスチューデントとは何度もメールし、仲良く話していたけれど、いざ会話をするとなるとなかなかうまくいかなかった。ブロードミドウ駅から車でホストファミリーの家に向かった。家に着いてすぐホストファミリーにお土産を渡した。特にコアラのマーチやリアル寿司キーホルダーはとても喜んでくれた。喜んでくれて少しほっとした。お土産を渡し終えひと段落ついた後、ホストスチューデントと一緒にお菓子を作った。グミとマシュマロをチョコで固めたものだった。そのお菓子は日本では味わえないような不思議な味だったがおいしかった。

休日は、ホストスチューデントとホストシスターがやっているネットボールの

試合の応援に行ったり、海辺でフィッシュアンドチップスを食べたり、ホストファミリー主催の音楽パーティーに参加するなどとても有意義な時間を過ごした。また、火曜日と水曜日には研修メンバーとニューカッスル大学ランゲージセンターや動物園に行った。動物園ではオーストラリアのシンボル的存在のコアラやカンガルーをみて回った。さらに、エミューの産まれたての緑色の卵を見ることができた。

火曜日と水曜日以外の平日はホストスチューデントと一緒に学校に通った。オーストラリアの学校は日本と比べ自由でとても楽しかった。また各授業が終わるごとにある長い休憩では、ホストスチューデントの友達と輪になってお菓子を食べ、小さなボールでゲームをして遊んだ。ホストスチューデントやその友達を含め私の通ったコタラ高校の生徒はとても優しく「電話番号は？」などと気軽に声をかけてくれたりしてとても充実した学校生活を送った。

放課後はショッピングセンターに連れて行ってくれたり、筆ペンで漢字を書いてみたり、折り紙を折ったり、ホストスチューデントと二人で白米を炊くなど短い時間の中、二人でたくさん楽しい思い出を作った。特にホストスチューデントは折り紙を喜んでくれた。鶴や箱など作ったが兜が完成した時は“サムライハット”と何度も口ずさみ「Ｂｅａｕｔｉｆｕｌ」と絶賛してくれた。少し小さかった兜を頭の上にのせ色々な種類の折り紙で写真を撮った。

お別れの日、ホストファミリーと強くハグをし「必ず戻ってくる」といって駅をあとにした。ホストファミリーのいる駅から遠のいていくうちに感謝と悲しみが込みあげてきた。

この研修を通して日本とオーストラリアの生活習慣の違いを実感した。しかし、人種や言葉は違っても人の思いやりやあたたかさは一緒であった。また、何よりも大切なのは心を開いて接することが大事であることも分かった。いつか必ずオーストラリアに戻っていたいと思う。

私たちと共に引率してくださった先生方や国際政策課をはじめとするこの事業に関わってくださった全ての皆さまに感謝します。本当にありがとうございました。

帰国報告書

藤山中学校　樋口　美月

私は今回の派遣事業でニューカッスルに行くにあたって、大きく二つの目標を立てていました。一つ目は、英語を話す国に実際に行ってみて英語力を磨くこと。二つ目は、ホストファミリーや研修生の皆をはじめ、いろんな人と仲良くなることでした。どちらの目標も十分に達成できたと思います。これから紹介するのは、ニューカッスルで過ごした充実した日々についてです。

私は今回の研修が初めての海外でした。私のホストファミリーであるウィンター一家は、とてもあたたかく私を迎え入れてくれたのでとても安心しましたが、いきなり英語でたくさん質問をされてパニックになってしまいました。多少は英語ができるつもりだったけれど、この時は答えるどころか聞き取ることすらままならなくてとても焦りました。でも、ホストファミリーは聞き取れなかった時は何度でも繰り返してゆっくり話してくれて、私が伝えようとしていることも一生懸命理解しようとしてくれたので、私の方も頑張って伝えてみようという気になれました。

ニューカッスルに着いた翌日の土曜日は、ホストシスターのアライヤと妹のトリニティーがまちを案内してくれました。姉妹はスケートボードに乗るのが好きだという事で、スケートボードに乗って案内してくれました。私は乗れないのでスクーターに乗せてもらいましたが、少し恥ずかしかったです。町を案内してもらっていると日本では見られないような風景や人々、行事などがたくさん見られました。なかでも私が驚いたのは日本で自転車に乗っている人が多いように、沢山の人々がスケートボードに乗っていたことでした。やっぱり異文化だなぁ…!と感じました。

翌日の日曜日は動物園に連れて行ってもらい、月曜日からはハイスクール通学

でした。何より驚いたのがとにかく学校が大きくて生徒が沢山いることでした。また、同い年の子でも随分と大人びていたのも驚きでした。授業は一時間あたり７０分と長い代わりに授業数は少なかったです。授業が終わるごとに休憩があり、皆軽食にお菓子を食べていました。日本では有り得ないことばかりでとても楽しかったです。

ハイスクール通学の日はあっという間に終わり、お別れの日が来ました。ホストファミリーに駅まで送ってもらいましたが、トリニティーは学校行事の関係でいませんでした。いよいよ電車が見えて、お別れの時がやってきました。泣かないと決めていたけれど、アライヤとホストマザーが号泣してくれたのでもらい泣きしてしまい、号泣しながら電車に乗り込みました。研修生の皆と電車内で泣きながら「絶対みんなでまた来よう！」と約束しました。

１０日間の研修を終え、沢山の新しい体験と経験によって大きく成長できたなぁと感じています。このような機会を与えてくださった方々に感謝し、これからの英語の勉強に役立てていきたいと思います。そして、いつか必ず戻りたいです。

南半球の私の家族

西岐波中学校　藤本　すず

日本からシンガポールでのトランジットを経て私たち１２名はシドニーへ到着した。そして、その日のうちにブロードミドウ駅へ向かった。そこでホストファミリーと落ち合った。

私は吉田さんと共にスコットさん一家にお世話になった。彼らは私たちをとても気遣ってくれたので、ホームシックやカルチャーショックも全くなかった。

そんな優しい家族の元で、一緒に動物園や海ピクニックへ行ったり、スーパーで買い物をしたりすることができた。

月曜日からは学校へ行ったり、市長を訪問させていただい

たり、ニューカッスル大学へ行ったりと非常に充実した日々であった。
　コタラハイスクールは中高一貫の公立学校で、全校生徒は千人以上という大きな学校だった。
　日本の学校との大きな違いは授業にあった。日本では教科書通りの用語を覚えるものが多い。だが、こちらの学校では、スクリーンに先生が事前にまとめてあるページが示される。生徒は、それをパソコンに入力するのが基本の授業の形であった。それに、日本では美術くらいしか自己表現の授業がない。しかし、こちらでは生徒が自ら表現することに重きをおいていると感じた。たとえば、地理にしても、もっとも自分が住みやすい都市をレポートにしたり、音楽では好きな楽器を演奏したり、家庭科では服をつくったり、ケーキをデザインから考えたりなど。これらの自己表現が日本の中学１年生ぐらいから始まっていて驚きだった。そこが日本より優れていると感じた。
　しかし、授業に集中する生徒が日本に比べ少なかったのもまた事実であった。
　そんな学校生活の後は家族団欒のひとときであった。アフタヌーンティーをしにカフェに行ったり、トランポリンなどをしたのが本当に楽しかった。
　スコット家は本当に良い家族であった。家事は、時間がある方がするのが当たり前だった。残業がほとんどないオーストラリアでは理想の家族になれると思った。
　料理では、スコット家のお父さんが作るタコスが一番おいしかった。ラムの BBQ よりも、現地で有名なオシャレな店の味よりも。今でもあのタコスをもう一度味わいたいと思う。
　また、ニューカッスルはシドニーに比べれば少ないものの多くの外国人が暮らしていた。スーパーマーケットは多くのアジア料理の品が普通に並べられていて、多民族だと感じた。だから、アジア人として変な目で見られることがなかった。その点が私にとって一番オーストラリアが好きになった理由だ。
　そんな大好きなオーストラリア、それもニューカッスル市に将来住みたいと思った。日本に住みやすさで勝る国はないと思っていたが、こんな若いうちから簡単に見つけられるとは思ってもみなかった。
　スコット家のみんなありがとう！一生忘れません！また遊びに行きます！

帰国報告書

桃山中学校　松原　響子

シドニー空港を出たとき、オーストラリアの空気はなんてきれいなんだろうと思いました。日本の蒸し暑い空気とは全く違い、清々しい空気でした、

ホストファミリーと会ったとき、嬉しすぎて何も言葉が出てきませんでした。会った時の挨拶の言葉も考えていたのに、すべて忘れてしまいました。そんな私にもホストファミリーは、優しい笑顔で接してくれました。その日は、初めてオーストラリアの家庭料理のウインナーを食べました。とても濃そうなウインナーでしたが、ジューシーでおいしいウインナーでした。

３日目私はホストファミリーと、すず＆しおりファミリーと海へ行きました。砂浜は白く、海は透き通った青でした。海辺を少し歩いた後、みんなでピクニックをしました。お菓子やパンがたくさんあり、すべて食べきれませんでした。そして、みんなでクリケットというスポーツを行いました。ルールは簡単で、とても楽しかったです。

月曜日から学校に行きました。校舎がとても大きく、ＡブロックからＤブロックまでありました。けれど、体育館だけは、日本の体育館とほぼ同じ大きさでした。体育館ではダンスの授業がありました。単調なダンスをただひたすら踊りました。学校でできた友達がいろいろ優しく教えてくれました。おかげでとても楽しかったです。

日本語の授業では、自己紹介をしてその後みんなで鶴や兜、手裏剣を折りました。みんな嬉しそうに小さな兜を頭にのせたり、スマートフォンのカバーの中に入れたりしていました。喜んでもらえてとても嬉しかったです。

音楽の授業では、私たちは歌、生徒たちはギターやピアノを弾いて、音を奏でました。音楽の授業でギターを演奏することに、とても驚きました。ジョンレノンのような人がとても上手だったので、さらに驚きました。音楽の授業も日本と

はまったく違って、面白かったです。

お別れの時、私は「帰りたくない。ずっとここにいたい。」という気持ちでいっぱいでした。最後の時も、優しい笑顔で見送ってくれました。何があっても、どんな時でも、笑顔で優しく接してくれたホストファミリーに、感謝の気持ちでいっぱいです。

私はこの研修で、中学生の時にオーストラリアに行った、という貴重な体験ができました。今回の研修で経験したことを、私のこれからの人生に生かしていきたいです。そして、もっと沢山勉強して、もう一度オーストラリアに行きたいです。

帰国報告書

黒石中学校　吉田　色織

ついに明日。そう思うだけで弾けそうだった日がついに来た。朝早くバスに乗り、ニューカッスルに着くまでは興奮しすぎていてあまり記憶にない。ホストに初めて会い、初めての夜ご飯。ここはあなたの家だから自由に使ってと言われるもそうはならず、最初はとても緊張していた。言いたいことはあるものの、積極的に話せず、頭で英訳してからではないと言えなかった。

次の日、ホストファザーが動物園へ連れていってくれた。そこでもまた言っていることが分かってないのに頷いてしまったりしてしまった。２日目は海にピクニックに行った。海が透き通っていて、何メートルも下の海底が透けて見えた。２日目、３日目と進んで行くに連れて、単語をなんとか繋げたら通じるということがわかり、自ら意見を積極的にだすことができた。

３日目の学校ではほんとうに驚くことばかりだった。２時間目が終わるとおやつを食べていい時間があり、先生が生徒におやつをあげていてほんとうに驚いた。また、日本ではノー

トに板書をするが、生徒は自分がもっているパソコンを学校にもってきて、それで板書をしていた。先生もパソコンで授業をしていてすべての教室にスクリーンがあった。ほとんどの授業でパソコンを使用していた。音楽を聞きながら板書していた生徒がいたので音楽を聞きながら授業を受けて良いのかと聞くと、ゲームはダメだけど音楽を聞くのはいいと言っていて、そんなことをして集中できるのかと思った。学校では年下の授業に加わったのにも関わらず、先生が話すのが速く、ほとんど聞き取れなかった。

４日目からは普段の会話なら相手の言っていることがだいたいわかるようになって自分でも発言するのが楽しくなった。そこで気づいたことは夕食時間がとても長いということだ。１時間は普通に超えていた。家族だんらんの時間を大切にしているらしく、家族の１人が話すときは家族皆が耳を傾けて聞いていた。

最後の日、ホストファミリーがショッピングに連れていってくれ、家に帰ってからサプライズをされた。

その時に、もう明日までなんだという実感が湧いてきて自然と涙がでてきた。その時に、普段は恥ずかしがりやのホストシスターがギターを弾いて歌って、もう１人のホストシスターは日本語をローマ字にして手紙を書いてくれた。本当に帰りたくなかった。

出発の日の朝、またすぐ戻ってくるよと言って電車に乗った。

この私の旅は研修でもあるが人生の大切な経験、出会いとなった。この研修を率いて下さった二人の先生方はじめ、私を引き受けて下さったＳｃｏｔｔ家に心から感謝し、この素晴らしい多くの体験を生かしてこれから過ごして行きたい。また、この研修を通して将来の夢に対する思いが今まで以上に強くなった。次にコタラハイスクールに行くときは立派な先生になって行きたい。

オーストラリア研修を終えて

宇部フロンティア大学付属中学校

吉村　美乃里

７月２８日の朝早く私達は宇部市をバスで出発し福岡空港からシンガポール経由でオーストラリアに向かいました。その日期待と不安で飛行機の中ではよく眠れませんでした。到着初日はバスでシドニーの観光をしました。いつもはポストカードでしか見ることのできないオペラハウスを間近に見ることができてオーストラリアに来たことを実感しました。その後電車に３時間ほど乗ってニューカッスルに向かいました。駅に着くとホストペアレンツのスーとアルバンが暖かく出

迎えてくれました。最初は何を話せばよいのか緊張しましたが、スーがわかりやすい英語でいろいろ話しかけてくれてほっとしました。スーは私達が訪問するコタラハイスクールのＥＳＬの先生でした。日頃はパプアニューギニアに単身赴任中のアルバンと近所に住む娘のレベッカ一家がホームステイに合わせて集まってくれていました。週末は海の近くの別荘でバーベキューをしたり、「４４」という鬼ごっこのような遊びを孫娘のビアンカに教えてもらったりととても楽しく過ごしました。念願だった南十字星も観測することができました。

月曜からはいよいよ現地のハイスクールに通学です。コタラハイスクールは生徒数が１０００人を超える活気のある学校でした。留学生も多く在籍し、国際色豊かです。モーリーとユミコ(タイ人)、ケアリーの３人がお世話係として校内を案内してくれました。３人は私を和まそうといろいろ話しかけてくれましたがネイティブの英語は速すぎてなかなか聞き取れず、彼女たちの質問にすぐに返答できなくて焦りました。特に困ったのはモーリーに「インスタグラムやってる？」と聞かれた時です。その時私はインスタグラムの存在を知らなかったので何のことやらさっぱりわかりませんでした。結局スマートフォンのホーム画面をみせてもらい、インスタグラムというアプリがあるのだということを初めて理解しました。異国の人と会話するには言語だけでなく知識も必要なのだと痛感しました。８年生の数学の授業を受けた時は習ったことのある単元だったので英語でも理解できて嬉しかったです。

私は今回の研修で「オーストラリアの人と楽しく会話する」ということを一番の目標としていましたが、どうにかそれは達成できたように思います。ただそれは自分の英語力ではなくオーストラリアの人のコミュニケーション能力によるものが大きいです。緊張しているときに変顔で笑わせてくれたり沈黙しないよう場を盛り上げてくれたりと、ただ淡々と話すだけが会話ではないと教えられた気がしました。

今回の研修を通して私は様々な経験をし、いろいろなことを学びました。このような機会を与えていただき、本当にありがとうございました。

帰国報告書

東岐波中学校　渡邊　柊平

僕は、このジュニアグローバル研修事業に参加するに当たって１つの目標「ホストファミリーだけではなく現地の人たちとしっかりと交流する」という事をしっかり達成すると誓ってオーストラリアに旅立ちました。

今回の研修が初めての海外だったので、初日は英語を使う事が少なくてもシンガポール空港で買い物する時にドルを実際に使えたのでよかったです。

シドニーに到着した日はいろいろなことに驚きました。日本と違って外は涼しかったり、交通マナーが違ったりしていて、気になる点がいっぱいありましたが自治体国際化協会を訪ねた際にオーストラリアについての説明を受けたのでよりオーストラリアについて興味を持つことができました。その後は電車に乗りホストファミリーの待つブロードミドウ駅に向かいました。電車に乗っている時間は長かったですが、不思議とその間不安は無く早くホストファミリーと会ってみたいという気持ちで胸がいっぱいでした。駅についてホストファミリーのトモとその弟と母に会った時は自己紹介ぐらいしかできなかったけれど家に向かう途中で家族の事や家の付近の事を教えてもらいました。ホームステイする家に着いてからは、家の設備についてなどを優しく教えてくれて落ち着いて過ごすことができました。食事の時などはトモとホストマザーに日本の天気の事や学校の事などを聞かれたので、自分の使える英語を精一杯使って説明しました。会話しているうちに家族に迎え入れてくれた気がしました。

研修３日目の朝はホストと犬の散歩に行ったり近くのデパートまで一緒に歩いて行き、昼食を食べたりお土産を買ったりして午前中を過ごしました。午後にはトモの入っているサッカークラブの友達が遊びに来て色々話し

たり一緒に夕食を食べたりと、楽しい時間を過ごすことができました。

研修４日目は動物園に連れて行ってもらいました。日本では余り見られない動物を間近で見たり、コアラに触れました。帰る途中にビーチに寄った時に冬なのに泳いでいる人がいたので驚きました。

研修５日目からはコタラハイスクールに行きました。学校では、日本語の授業に参加したり、ホストのクラスの授業に参加したりしました。特に休憩時間にクラスメイトと一緒にしたバスケットボールが一番楽しかったです。学校２日目には宇部のプレゼンをしたり市役所に行ったりした後に、体育の授業でまたバスケットボールをしました。この時はたくさんの生徒と一緒にプレイしたり話したり、先生には日本の学校について聞かれたりし、色々大変だったけど友情が深まりました。

学校３日目にはニューカッスル大学に行きオーストラリア英語について教えてもらいました。内容は全部理解できなかったけれどオーストラリアについて深く知ることができました。学校４日目は学校が終わった後に友達と一緒に写真を撮ったりしたのでいい記念になりました。

そして研修９日目駅でトモとホストファミリーと別れる時に、またここに戻ってくるよと伝えて別れました。帰りの電車や飛行機に乗っている時日本に帰るのが少し残念だったけど、この経験をしっかりと将来に向けて生かしていこうと思いました。

引 率 教 諭 報 告

平成２８年度ジュニアグローバル研修派遣報告書

宇部市立桃山中学校　教諭　尾﨑　哲也

宇部市とニューカッスル市は姉妹都市提携をして、今年で３６周年を迎えました。地元である宇部市で育った私としては、中学生当時からこの研修派遣については知っており、興味はありましたが、人事として捉えていました。ですから、まさか自分がニューカッスルに引率教員として行くことになるとは想像していませんでした。この研修派遣の生徒引率をするにあたり、宇部市の歴史の１ページに加わることができ、宇部市民としてたいへん光栄に思うとともに、すばらしい機会を与えてくださったことに感謝しているところです。

さて、今年度は、１０名の生徒たちと２名の教員、計１２名でのニューカッスル訪問となりました。現地では、コタラハイスクール通学、ニューカッスル市長訪問、ニューカッスル大学ランゲージセンター通学が研修予定として組まれており、研修場所で「宇部市を英語でプレゼンテーションする」というミッションが派遣生徒たちに課せられました。事前研修では、宇部市の魅力についてしっかりと英語で伝えようと、熱心に話しあいを重ねながら練習し、コタラハイスクール通学３日目の朝に発表しました。コタラハイスクールは日本でいう中高一貫教育校で中学校１年生（オーストラリアでは７年生）から高校３年生（オーストラリアでは１２年生）まで１０００名を超す生徒が在籍しています。授業は通常１５時頃まで行われています。午前１・２時限、午後３・４時限で日課が組まれています。曜日によって１時限あたりの授業時間は若干異なりますが、日本の５０分授業と違い、１時限あたり７０分と長いです。授業開始･終了のチャイムはなく、

終了時刻が来たら授業を終え、次の授業のクラスに向かい、開始時刻に合わせて授業が始まります。コタラハイスクールの教員の中にも、授業開始が静かでスムーズに行えるという点で、日本のチャイムが鳴るシステムのほうが良いと思っている方もいらっしゃいました。また、授業間は飲食が自由で、多くの生徒たちがおやつを食べている姿を見て、派遣生徒たちは驚いていました。授業後は一斉に下校します。部活動は存在しません。オーストラリアでは習い事として、地域のスポーツクラブやその他の文化・芸術団体に所属して活動しています。このような日本の環境とは異なる学校で、「宇部市を英語でプレゼンテーションする」というミッションは、派遣生徒たちにとって大きなチャレンジでしたが、堂々とした態度で、見事な発表を行いました。コタラハイスクールの教員も生徒も興味深げにスクリーンを見つめ、じっくりと派遣生徒の発表を聴いていました。発表後は、賛辞の拍手と多くの絶賛のコメントが寄せられました。引率教員として派遣生徒の大きな成長を感じとった瞬間でした。

次に研修先での様子を紹介します。コタラハイスクールで授業を受けることが研修の大半を占めました。通学初日の午前中は日本語クラスの授業に参加しました。グループになって、ハイスクールの生徒と英語・日本語を交えながら互いに自己紹介をした後、折り紙や剣玉といった日本文化を代表する遊びを行いました。折り紙遊びでは、鶴、蛙、兜、手裏剣、カメラなどを作り、大いに盛り上がりました。言葉ではうまく伝えられなくても、一緒に何かを作るという取組を通して、気持ちはわかりあえるものです。派遣生徒もハイスクール生徒も笑顔で授業を楽しんでいました。

午後からはそれぞれのホストスチューデントが受ける授業に一緒に参加しました。スポーツやダンスといった身体を使った活動を一緒に行う授業に参加したことで、自分に自信がつき積極的にコミュニケーションがとれるようになった生徒もいました。自分が思っていることを“言葉に出して相手に伝えられない”というもどかしさと悔しさは、大人が思っている以上に生徒たちにとって“大きなつらさ”だったと思います。しかし、コミュニケーションをとる上で大切なことは、言葉以上に“言葉の壁を越えたふれあい”が何よりも大切なことであると感じ取ったに違いありません。そのことは生徒の表情と、「楽しい！」というひと言に表れていました。通学最終日には、積極的にハイスクールの生徒と関わっている自信に溢れた姿を見ることができました。

また、ニューカッスル大学や一般財団法人自治体国際化協会（ＣＬＡＩＲ）シドニー事務所を訪れました。ＣＬＡＩＲでは、日本政府観光局（ＪＮＴＯ）の方にもおいでいただき、それぞれの事業内容の説明をしていただきました。海外で勉強したり、働くことへの関心が高まるとともに、グローバルな視点で物事を捉え、考えるためのよい機会となりました。また、実際に海外の生活に身を置く今回の経験は、派遣生徒たちにとって自分たちが育った街の魅力を改めて考えるという、この研修の中で学ぶべき点ではないかと思っています。海外で見聞を広め、

地元の発展に貢献する生徒の育成という点においても、たいへんすばらしい研修事業であると考えています。今、日本の義務教育では、「将来、社会的・職業的に自立し、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現する力」が求められています。「めまぐるしく変化する社会において、生徒たちが希望をもって、自立的に自らの人生を切り開いていく生きる力」を育むためにも、私自身、教員として、キャリア教育の重要性を再認識しました。研修で学んだことをこれからの教育にしっかりと生かしたいと思います。

最後になりましたが、今回このようなすばらしい研修機会を与えてくださった宇部市、宇部市国際政策課、宇部市・ニューカッスル市姉妹都市友好協会、宇部市教育委員会、そして研修派遣に携わっていただいたすべての皆様に深く感謝するとともに、宇部市とニューカッスル市が、ますます発展し、姉妹都市関係が末永く続いていくことを心より祈念しております。ありがとうございました。

帰国報告

楠中学校　教諭　永田　博子

ジュニアグローバル研修の引率として宇部市の姉妹都市であるニューカッスルへ行かせていただきました。この度の１０日間の主な日程は、自治体国際化協会（ＣＬＡＩＲ）訪問、日本政府観光局（ＪＮＴＯ）訪問、姉妹都市のニューカッスル市長舎訪問、コタラハイスクールでの体験授業、ニューカッスル大学ランゲージセンター訪問、校外研修（アンザックウォーク、ブラックバット自然動物公園観光）でした。１０名の生徒も、出発前から目標をしっかりと定め、意欲的に宇部市のプレゼンテーションの準備を進め、研修へ大きな期待をもって取り組んでいました。１０日間を振り返り、いくつかの成果をご紹介します。

１　宇部市とニューカッスル市

宇部市とニューカッスル市は昭和５５年から姉妹都市の関係を続けています。その経緯には二つの都市の規模や炭鉱による発展の歴史など多くの類似性が挙げられます。実際にニューカッスルで過ごしてみて、現地の方の人柄もよく気候も快適で住みやすさを感じたのは宇部市と雰囲気がよく似た静かな街だということや、３５年の間に積み重ねられてきた交流があったからだと思います。この度の研修でも、宇部市を現地で紹介することが目標の一つでした。コタラハイスクールではＹｅａｒ８（中学２年生）の前で、日本から練習していったプレゼンテーションを堂々と披露し、宇部市の紹介ができました。事前に宇部市について振り返り、それを英語で紹介するという取り組みは、ニューカッスルを知る前の大切な学習だったと思います。市長舎を訪問した際には、副市長様からニューカッス

ル市についてのお話を伺うこともできました。記帳した芳名帳には日本各地からの訪問者の名前が数多く記帳されていました。そこに宇部市から訪問した学生の名前がたくさんあったことにたいへん驚き、宇部市とニューカッスル市の関係の深さを感じました。

２　コミュニケーション能力

何名かの生徒は事前の目標に多くの人とコミュニケーションをたくさんとり、友だちを作りたいという目標を立てて研修に臨んでいました。初日こそ少し緊張している生徒もいましたが、研修の終わり頃には、１０名の生徒全員が各自のホストファミリーを中心に意欲的に現地の生徒に話しかけていたように思います。彼らにとって難しい英語もたくさんありましたが、コミュニケーションという点では言葉の壁を越え、心を通じ合わせて、笑顔で過ごすことができた実りある体験になったと思います。言葉の壁がある分、お互いを理解しようとすることで、ニューカッスルの方々の優しさを感じとり、それに答えようとする思いをもてたことはとてもすばらしいことでした。生徒にとって将来的に役に立つ力を身につけることができたように思います。語学レベルでのコミュニケーションではオージーイングリッシュとしてよく言われる「デイ」を「ダイ」と発音することやちょっとした表現で「ｃｈｉｐ」が「ｃｈｉｐｐｉｅ」や「Ｄｏｎ’ｔ ｗｏｒｒｙ.」を「Ｎｏ ｗｏｒｒｉｅｓ.」など、聞き慣れない表現も、１０日経つと自然と耳に入るようになりました。

３　相違点と適応能力

１０日間ニューカッスルで過ごすと、生活の中で様々な相違点を見つけることができました。それは日本とオーストラリアの違いでもあり、各家庭の生活習慣の違いでもあると思います。一般的には家の中へも土足で入ることや食事の主食はパンを食べることなどです。これらも実際に体験することで、それに自分が順応できるかがわかります。トイレは家庭でも使用しないときはドアを開けたままにします。それが使用中でないことを示します。朝の食事には味噌汁などのスー

プ類はでません。スーパーにはベジタリアン用の食事やグルテンフリーのものが多く並んでいて健康志向が流行しているようでした。学校では休み時間は生徒もお菓子を食べたり、携帯を触ったりできます。これらの一つひとつを体験し、受け入れて生活することにはとても意味があると思います。その違いから自分たちの文化を見直すことも大切になると思います。そこから見えてくる日本の生活のすばらしさもあります。返る頃には日本食が恋しくなった生徒もいます。衛生面など日本の良い点を振り返るきっかけにもなったと思います。

１０日の間に数多くの体験をさせていただきました。今後１０名の生徒がこの体験を基に自分の将来をしっかりと考え、広い視野をもったグローバルな大人へと成長できることを心から願っています。これからも向上心をもって、自分の目標に向かって努力をしてほしいと思います。

最後になりましたが、この度のニューカッスルへの派遣引率の機会を与えていただいた宇部市、国際政策課、姉妹都市友好協会、教育委員会、この派遣に携わってくださいました全ての方々に心から感謝申し上げます。これからの宇部市とニューカッスル市の姉妹都市関係が末永く続きますことをお祈り申し上げるとともに、両市の今後の発展を心より祈念しております。本当にありがとうございました。

資　料

ニューカッスル市の概要

ニューカッスル市は、オーストラリアの南東部、ニューサウスウェールズ州の東海岸部中央に位置し、シドニーの北東約 160ｋｍにあるハンター地方の首都で、人口約 16 万 1 千人（2015 年現在）、気候は温暖で、州内第 2 の産業都市です。

かつては、市内でも採掘されていた石炭は、製鉄所や造船その他の関連工業を興し、臨海産業都市として発展してきました。

市の北西約 100ｋｍの背後に広がる豊かなハンター炭田は、オーストラリアで最初に開発された歴史を持っています。

石炭による豊富な電力により、近年はアルミニウムや車両、化学製品などの産業が興っています。また、ハンターリバー流域は、農業や酪農が盛んであり、特にハンターワインは有名です。

市の中心部には、大学を始め高い水準の教育、文化、体育施設があり、さらに、美しい港、公園を有する都市で、毎年 200 万人の観光客が訪れます。

姉妹都市提携の背景

昭和 54 年（1979 年）3 月に定められた宇部市総合計画基本構想において、「国際社会の調和ある発展に寄与し、姉妹都市提携による総合的な交流を展開する」ことを掲げ、9 カ国 21 都市を候補として、調査・検討を進めました。

一方、市内主要企業においては、昭和 51 年（1976 年）以来石油にかわるエネルギーとして、石炭をオーストラリアから輸入し、経済交流が続いていました。

このような情勢の中で、昭和 55 年（1980 年）7 月、22 人の市民有志による豪州親善視察団が、オーストラリアの数都市を視察調査し、帰国後、姉妹都市としてニューカッスル市が最適である旨の報告が提出されました。

その後、種々検討のうえ、同年 9 月、市議会の賛同を得て、ニューカッスル市との姉妹都市を決定し、11 月 21 日にニューカッスル市において調印式を行いました。

主な交流経過

姉妹都市提携以来、教育・文化、青少年、スポーツ、経済等幅広い交流を行ってきました。この間、昭和 60 年（1985 年）には、宇部市・ニューカッスル市姉妹都市友好協会が設立され、市民レベルの交流が活発に展開されるようになりました。

青少年交流については、昭和 61 年度から高校生研修派遣、平成 3 年度から中学生研修派遣が実施され、交流の重要な分野の一つとなっています。

文化交流については、これまで提携 10 周年、15 周年、20 周年、25 周年、30 周年といった節目の年に文化訪問団を派遣し、交流を深めています。

宇部市広報・シティセールス部
国際政策課

〒755-8601　宇部市常盤町一丁目７番１号
ＴＥＬ　０８３６－３４－８１３７
ＦＡＸ　０８３６－２２－６０８３
E-mail kokusai@city.ube.yamaguchi.jp